日蓮宗身延山久遠寺、重須本門寺、池上本門寺の伽藍配置

正 会 員 丹 羽 博 亨*

1. 序

日蓮寺院の研究は櫻井敏雄氏が『鎌倉新仏教仏堂平面の成立と系譜に関する研究』¹⁾で、仏堂の遺構を発見・整理し、復原・分類し平面形態や、その成立過程を明らかにし、伽藍配置についても名所図会等によって祖師を祠る堂が本堂の他に、中心堂宇として伽藍の中枢に登場してくる過程について考察されているが、本堂と祖師堂の両堂の配置や構成の在り方について問題を提起されている。

仏教寺院の伽藍配置について考える場合、その背景となる教義が反映されているはずであるから、係る観点から考察することによって、その性格が明らかになるものと考えられる。

前稿において日蓮の教義・行儀の両面より日蓮が志向していたと考えられる伽藍観と、それが直弟子たちにどのように継承され初期日蓮教団寺院の伽藍へと発展したかについて考察した²⁾。その結果、日蓮歿後、日蓮への追慕想起の念は日蓮の御影像の造立、さらに御影堂の建立へと発展し、なかでも、御影堂が最も早い時期から建立された寺院は、身延山久遠寺(山梨県南巨摩郡身延町)、重須本門寺(静岡県富士宮市北山)、池上本門寺(東京都大田区池上)であったことについて述べた。

本稿においては、これらの寺院について古文書、古記録、伽藍古図等の関係史料を基に、主要堂宇たる本堂と御影堂の推移の過程と伽藍配置について考察しようとするものである。

2. 身延山久遠寺における主要堂宇と配置

日蓮は文永 11 年(1274)に身延に入り、弘安 4 年(1281) 11 月には大坊・小坊・馬屋を建立している。しかし、日蓮は弘安 5 年(1282) 10 月 13 日に武蔵国池上宗仲の館にて歿している。日蓮の遺骨は葬送・荼毘の後、身延に移され墓所が建てられた。

日蓮歿後の身延山久遠寺は、弘安 5 年 10 月 16 日の日興(1333 歿)筆『御遷化記録』に「御遺言云・仏者^{聖立}墓所傍可立置、経者^{私集要文}同籠置墓所寺」³⁾とあることから、「墓所寺」としての性格をもっていた。

その後、日興の弟子日順の記した『日順雑集』の「從開山伝日順法門」に「身延山ニワ日蓮聖人九年、日興上人六年御座有、聖人御存生ノ間ハ御堂無シ、御滅後ニ聖人御房ヲ御堂ニ日興上人御計造玉フ、御影ヲ造ラセ玉フ事モ日興上人、御建立也」⁴⁾とあり、また日尊(1345 歿)の『尊師実録』に「弘安七年甲申五月十二日甲州身延山登山、同年十月十三日大聖人相^ニ当第三回御仏事^ニ日始日興上人対面、御影堂出仕」⁵⁾とあることから、日興によって日蓮の御影像が造立され、住房は御影堂に改築されている。

身延山久遠寺第 3 世日進(1346 歿)と親交の深かった中山法華経寺第 3 世日祐(1374 歿)書『一期所修善根記録』の「身延山参詣事」によれば、日祐は康永元年(1342) 4 月「日蓮聖人塔中柱立」⁶⁾とあり、塔中柱立の儀式に参列している。また、同書の「精舎勧進宮並結縁」によれば「此外身延山久遠寺同御影堂・大聖人御塔中・塔中板本尊金薄造宮修造結縁」⁷⁾とあることから、日進の代においても身延山久遠寺の伽藍は御影堂と「大聖人御塔中」即ち日蓮の廟所が中心であった。

中世における身延山久遠寺伽藍の大きな変動時期は第 11 世日朝(1500 歿)の代であった。

日朝の弟子日意(1519 歿)の文明 10 年(1478)の書『身延山伽藍記』に

吾師朝公来^テ主^リ干茲^ニ是地隘狭^ニ衆^ニ苦^レ之^ヲ師振^ニ鼎建^ニ之力^ヲ移^ニ今之地^ニ、⁸⁾(後略)

とあり、日朝は狭隘な西谷の地から現今の山腹の地への移転を計っている。最初の移転は文正元年(1466)の『三日講』一五巻奥書に「去霜月八日移大坊之間諸篇取乱多々障間書之」⁹⁾とあることから僧の住する大坊であったようである。この大坊は文正 2 年(1467)の『三日講』二十巻奥書に「大坊西向持仏堂」¹⁰⁾とあり、また『三日講』二四巻奥書に「大坊西向学門所」¹¹⁾とあることから持仏堂、学門所を持っていた。

また、『身延山諸堂記』¹²⁾には「二重宝塔、三間四方、第十一世日朝師御代」とあり、文明 6 年(1474)には日蓮の御真骨堂たる二重宝塔が建立されている。そして、文明 12 年(1480) 2 月には日朝の『撰時抄私見聞』一卷に「今日二王門柱立」¹³⁾とあり、二王門が建立されて

* 広島工業大学 助教授・工博
(昭和 61 年 10 月 6 日原稿受理)

いる。

日朝の晩年、明応7年(1498)8月には大地震と山津波によって諸堂宇が崩壊している。その状態について日海(1518歿)の『日海記』に「日朝上人御建立之御塔頽落、坊中等悉流失」とあり、また、「御堂大坊并寺中惣房等悉破滅」¹⁴⁾とあることから、日朝の代における現在地東谷の伽藍は御堂(御影堂)、大坊、坊、二重宝塔、二王門等であり、現状の配置から推察すると、この時期に二王門が御影堂正面に存在する基本的伽藍配置が出来上がったものと考えられる。

その後の再建は第12世日意(1519歿)、第13世日伝(1548歿)の代で、『身延山諸堂記』に

一、祖師堂、拾七間四方、縁各二間宛。

第十三世日伝師建立、或云日意日伝両代建立。

初宝形屋根ナリ¹⁵⁾。

とあり、祖師堂¹⁶⁾の建立を伝えている。

日伝の『堂供養法則』¹⁷⁾に「外陣方便土者同居土詣随縁土謂也」、「内陣実報花王之砌聖衆来集処故世」、「仏壇是常寂光土唯仏与所居故也」とあることから、この堂宇は内陣と外陣よりなり。仏壇には同書に「謹安置導師之尊像」、「影像雖多不如本化之尊像」とあることから、日蓮の御影像が安置された御影堂であった。

この御影堂は正面に向かって見た場合、旧御堂(御影堂)の右側に建立され、二王門の軸線上に配されていた旧御堂は本堂に転用されたものと推察される。

そして、第18世日賢(1599歿)、第19世日道(1601歿)の代にいたって『身延山諸堂記』に

一 往古ノ本堂豆州伊東ノ大行寺¹⁸⁾送之。十一間四方也、拾

七間半四方椽九尺宛。

第十八世日賢師代建立未満遷化、第十九世日道師代ニ成就ス。

日道師ノ棟札ニ云慶長四巳亥年八月廿五日本堂者第十八世日賢聖人¹⁸⁾。

とあり、本堂が建立され、旧本堂は伊豆伊東の大行寺へ移築されている。この本堂建立の際に、同書に「中尊両佛四菩薩四天王」、「文珠普賢ノ二像」とあることから、日蓮が書写した文字曼荼羅を彫像化した本尊が造立されている。

貞享2年(1685)刊行の『身延鑑』¹⁹⁾に本堂内部について「霊山会上の儀式を移し、両尊・四菩薩・文珠・普賢いらかを並べ立ち拾う」とあり、祖師堂内部については「七宝荘厳を飾り、金の巻き柱・幢幡・幢蓋数百ながれ、千百あしの経机、常灯の数かがやきて、六時の勤行おこたりなし」とあり、また、日伝の『堂供養法則』には「常住内証之道場也、抑梁椽恒万行万善荘厳」とあることから本堂内部より祖師堂内部の方が荘厳化され、日々の行儀たる六時の勤行も祖師堂でおこなわれていることから祖師堂が中心的堂宇であったと考えられる。

その後、第27世日境(1659歿)の代、慶安4年(1651)に位牌堂が建立されたが、規模が小さすぎたためか第28世日奠(1667歿)の代、寛文6年(1666)に『身延山諸堂記』に

第廿八世日奠師代寛文六丙午八月ノ棟札有之。

十三間半二十一間半四方椽七尺²⁰⁾。

とあり位牌堂が再建されている。

この当時の身延山久遠寺の伽藍配置は金沢市本是寺所藏、元禄16年(1703)の「身延山境内図」²¹⁾(図-1)

図-1 身延山境内図

によって知ることができる。

この「身延山境内図」によると主要伽藍として三堂が併置して描かれている。

現在の主要堂宇の配置は正面に向かって見た場合、左側から本堂、祖師堂、位牌堂が併置されており、二王門の軸線上に本堂が存在しているが、「身延山境内図」にもそのように描かれているように思われる。そして、中央に配されている堂宇が両側の堂宇より大きく描かれているが、池上本門寺第16世日樹(1631 歿)の書状に「身延山大堂も三代廿四年にて出来申候」²²⁾と身延山久遠寺の祖師堂を大堂と呼称していることから、中央の堂宇は祖師堂であると考えられる²³⁾。

身延山久遠寺の主要堂宇たる本堂、祖師堂、位牌堂の三堂の中でも祖師堂の規模が最も大きく、中心的堂宇であったにもかかわらず、二王門の軸線が本堂正面に存在している。この理由は、旧地西谷においては祖師堂が中心的堂宇であり、第11代日朝の代に現在地東谷に伽藍を移した後も、祖師堂が中心的堂宇であり、すでに身延山久遠寺の基本的伽藍配置が出来上っており、第13世日伝の代に大堂たる祖師堂が再建された時に旧御堂(御影堂)が本堂に転用されたがためと考えられる。これと同様な伽藍配置は重須本門寺にも見ることができる。

3. 重須本門寺における主要堂宇と配置

日蓮歿後、身延山久遠寺は弘安6年(1283)正月に直弟子たちによって毎月輪番で墓所を守るために「身延山久遠寺番帳」が定められたが、輪番の勤仕は所期のとうりには実施されず、日興(1333 歿)とその一門の人々によって守られていた。日蓮の第3回忌までには日興によって日蓮の御影像と御影堂が建立された。

その後、日興は身延の地頭波木井実長とのあいだに信仰の態度をめぐる意見の対立があり身延を去り、富士の上野に移って草庵を結んで住した後、永仁6年(1298)2月に石川氏、南条氏の助力を得て重須に本門寺を創建している²⁴⁾。

創建当初の重須本門寺は正中2年(1325)の石川能忠入道妙源の『寄進状』²⁵⁾によれば御影堂と記され、また、康永3年(1344)の石川実忠の『寄進状』には「右坊地者己妙源奉_レ寄_二進故聖人_一之此彼状紛失之間任_二故入道例_一重奉_レ寄_二進両聖人御廟_一者也」²⁶⁾とあることから、日蓮と日興の廟所と御影堂が中心であった。

日辰(1576 歿)の『祖師伝』に

日辰・開山の御影堂の御棟札を拜見し奉れば御影堂は永仁六年の建立にして未だ本堂建立の棟札を見ざるなり、重須の本堂は開山御入滅の後建立の旨、大石寺の記に出たり²⁷⁾。

とあり、応永6年(1399)の大石寺第六世日時(1406 歿)の『大石寺記』には「今の重須の本堂は昔之無く御影堂計なり」²⁸⁾とあることから日興在世時中には本堂は建立されていなかった。

当初の主要堂宇は日興の弟子日順の『日順雑集』に文保第二の天、初日八日の候之を始め畢る。但し朝に大坊に奉って之を承り、夕べ御影堂に於て私に之を説く者なり。文保元年十二月廿七日、御影堂通夜。正月一日よりしては毎日法華經一卷、八日一部畢る云云²⁹⁾。

とあり、主要な行儀は御影堂においておこなわれていることから初期重須本門寺の中心的堂宇は身延山久遠寺と同様に御影堂であった。

本堂の建立は『日順雑集』に

一、本門寺、貞和三年_{丁亥}十月十三日造営なり。

願主、日妙 日順 日濟等。

大施主、石河式部太軸源実忠。

大施主、南条太郎兵衛平高光。

大施主、秋山式部太夫源宗信。

大工、本門寺大工兵衛目末信³⁰⁾。

とあることから、貞和3年(1348)であった。

その後、永禄12年(1569)2月4日に兵火によって焼失し、10年後の第10世日殿(1582 歿)の代、天正7年(1579)に本堂、御影堂、天堂が再建されている。

重須本門寺の伽藍配置を知る資料として寛政8年(1796)以後、文化5年(1808)焼失前頃のものとしてある木版「重須境内絵図」(図—2)がある³¹⁾。

この「重須境内絵図」によると主要堂宇は正面に向かって見た場合、左側から本堂、祖師堂、垂迹堂が併置されている。

現在の配置は二天門が本堂正面に存在しているが、「重須境内絵図」もそのように描かれている。

主要堂宇の配置について日我(1585 歿)の天文15年(1546)の『化儀秘決』によれば

一説に能開所開を以て云ふ時、本尊は所開、御影は能開、御影は所開、住持は能開等云云。

所開は死門、能開は生門、之れに依って多宝は左、釈迦は右、本尊の示書にも日蓮は左り、書写の人は右、去る間本尊堂は左り、御影堂は右、御影堂は左り、客殿已下は右なり、重須大石等此くの如し云云。(中略)

是れは何も仏の方より云ふ時の方角なり、参る人の為には右は左なり³²⁾。

とあり、当時の重須本門寺と大石寺³³⁾の伽藍配置は「参る人の為には右は左なり」とあることから、正面に向かって見た場合、本尊堂は右側、御影堂は左側に配されていたとして、近世初頭頃までは身延山久遠寺と同様に二天門の軸線上に御影堂が存在していた。

しかし、「重須境内図」に描かれている本堂と祖師堂の配置は逆となっているが、これは本堂と祖師堂の位置が、その後入れ替ったものと考えられる。

4. 池上本門寺における主要堂宇と配置

日蓮は弘安5年(1282)10月13日檀越の1人池上宗仲の館にて歿し、葬儀、荼毘され遺骨は身延に埋葬された。

その後、日蓮の第7回忌の正応元年(1288)には日持、

図-2 重須境内図

日蓮が大願主となって2尺6寸5分の等身大に近い日蓮の御影像が造立されている³⁴⁾。

日朗は文保2年(1318)に比企谷妙本寺(鎌倉市大町)と池上本門寺を日輪に譲っている。

日朗は元応2年(1320)と歿し、六七日忌にあたる3月2日にその弟子らが連署した『遺誠状』に

本門寺日朗聖人御遷化之後、為_レ其御門弟法門弘通_ノ意趣_ト守_ニ本所遺跡_ヲ可_シ為_ニ一味同心_ニ³⁵⁾。

とあり、池上本門寺は日蓮が歿した地であり、かつ遺骸を茶毘にふした場所であったことから、弟子らにとってはここは遺跡、霊跡たる「本所遺跡」としての性格を持っていた。

康正3年(1457)の日朗門流に伝わる『御本尊相伝抄』に「日向門徒_ニ法華堂_ヲ皆御影堂_ト習也」とあり、また、同書に「諸堂皆御影堂也_ト申伝也」³⁶⁾とあることから、初期においては御影堂が中心であった。

天明2年(1782)記『朗門流略譜』の第4世日山(1381歿)の項に「初テ池上ニ建_ニ高祖_ノ御影堂_ニ」³⁷⁾とあり、池上本門寺に第4世日山が最初に御影堂を建立している。

そして、宝暦6年(1756)の『池上家由緒』に「住居之山上ニ祖師堂并鬼子母神安置之寺在之」³⁸⁾と伝えていることから、身延山久遠寺、重須本門寺と同様に池上本門寺においても御影堂が最も早い時期に建立され、中心的堂宇であった。

その後、天文17年(1548)に第11世日現(1561歿)が書写した文字曼荼羅の端書に「於池上御影堂法談第二度目之時」³⁹⁾とあり、御影堂の存在がみとめられる。

池上本門寺は開山日朗以来、鎌倉比企谷妙本寺とは両山に称し、代々の貫主は比企谷妙本寺に常住していたが、第12世日愷(1598歿)は徳川家康に命ぜられ鎌倉から池上に移住し、江戸に五ヶ所の停住の地が与えられることによって両山の中心は池上本門寺に移っている。

第25世日顕(1753歿)の『諸堂建立覚』によると「当山第十二世日愷代本堂建立仕候節天正十三年中従、大権現様御杖木拝領仕本堂建立仕候」⁴⁰⁾とあり、第12世日愷の代、天正13年(1585)に本堂が建立されている。

文禄5年(1596)の日愷の書状に「今暦者於池上 元祖御骨堂建立相統_ニ客殿七間十二間ニ令造立今程作事最中二候」⁴¹⁾とあり、日蓮の御骨堂と客殿が建立されている。

次の第14世日詔(1617歿)の代には『諸堂建立覚』に「慶長十三年中従、台徳院様五重塔御建立被成下候」⁴²⁾とあり、慶長13年(1608)には五重塔が建立された。

この日詔の代における伽藍は、日詔の書状に「両堂上ふきやふり申候書院宝蔵くり客殿某外家十計も皆々ふきやふり申候」⁴³⁾とあり、また、同書状に「此元本堂之上葺令成就候只今御影堂之上葺最中に候」⁴⁴⁾とあることから、両堂(本堂、御影堂)、書院、宝蔵、庫裡、客殿等が存在していた。

安永9年(1780)の『池上家由緒』に「元和の頃に至り大からんと成へきによりて」⁴⁵⁾とあり、また、嘉永6年(1853)の『池上家由緒之条々』に「元和年中本門寺御建立有之」⁴⁶⁾とあることから、第12世日愷(1598歿)が池上本門寺に定住するようになってから急速に伽藍が整備されている。

第16世日樹(1631歿)は元和5年(1619)に池上本門寺に入山しているが、日樹の書状に「身延山大堂も三代廿四年にて出来申候」⁴⁷⁾と身延山久遠寺の大堂(祖師堂)は3代24年を費やして完成したとして、池上本門寺にも大堂建立を企てていた。そして、同書状に「目出大堂成就所願満足」⁴⁸⁾とあり、また、同書状にも「然者為_二我宗門莊嚴_一於_二当山_一大堂建立仕候」⁴⁹⁾とあることから、日樹の代に大堂が建立されている。

延宝7年(1679)の『大堂葺替棟札』に「当大堂建立者人王百九代、太上皇帝御宇寛永三年丙寅十二月成就」⁵⁰⁾とあることから、寛永3年(1626)に大堂が建立されている。

第18世日耀(1655歿)書『紺紙金泥法華経』の「第六巻端書」に「当武州池上長栄山本門寺大堂祖師尊像」⁵¹⁾とあり、また、日耀の『法度』に「一、大堂朝経日中不可有闕除事」⁵²⁾と定められていることから、大堂とは祖師(日蓮)の御影像を安置した祖師堂であり、日々

の行儀がおこなわれていることから中心的堂宇としての性格が強かったものと考えられる。

宝永7年(1710)に寺社御奉行所に提出した『池上本門寺作事願之事』に「一、茅葺釈迦堂、梁間十二間、桁行十四間」、「一、茅葺祖師堂、梁間二十三間、桁行二十五間」⁵³⁾とあり、釈迦堂と祖師堂の規模は祖師堂の方が大であったがために祖師堂を大堂と呼称したものと考えられる。

これらの池上本門寺の諸堂宇は宝永7年(1710)に焼失したが、享保6年(1721)の寺社御奉行所に提出した文書に「炎焼仕候堂ハ梁間二十三間桁行二十五間」として、「今般建立仕候堂ハ梁間十七間桁行十八間二仕来寅年々建立ニ取掛り候」⁵⁴⁾とあり、規模を縮小して祖師堂は享保7年(1722)、本堂は享保15年(1730)に再建している。

これらのことから、池上本門寺の釈迦堂と祖師堂の規模は第16世日樹の代、寛永3年(1626)に大堂、祖師堂が建立された時期から祖師堂の規模を本堂(釈迦堂)より大きくしたものと考えられる。

池上本門寺の伽藍配置は第25世日顥(1753歿)筆「長栄山絵図」(図-3)⁵⁵⁾によると、仁王門の軸線上には両堂が存在していない。

文久3年(1863)の「長栄山大國院本門寺配置図」(図-4)⁵⁶⁾によると、仁王門の軸線は両堂の中央にあわされている。

この理由は日藻(1858歿)の『興栄記』に池上本門寺の七堂伽藍について「池上ノ七堂者、祖師堂、釈迦堂、客殿、香積、鐘楼、宝塔、三門、己上七堂」とあり、祖師堂を第1位に置いており、また、池上本門寺の末寺たる妙泉寺の七堂伽藍を「祖師堂、客殿、食堂、鐘楼、仁王門、鬼母堂、万人堂、己上七堂也」⁵⁷⁾として釈迦堂がないことから、池上本門寺においては祖師堂が中心的堂としての性格が強く、また、身延山久遠寺、重須本門寺と同様に御影堂が最も早い時期に建立され、この御影堂を中心として発展してきたがためと考えられる。

5. まとめ

初期日蓮教団寺院においては、ほとんどが住坊や檀越の持仏堂であったようである。

しかし、日蓮歿後、日蓮への追慕想起の念は日蓮の御影像の造立、さらに御影堂(祖師堂)の建立へと発展した。

なかでも関東の日蓮宗大寺院である身延山久遠寺、重須本門寺、池上本門寺においては最も早い時期から御影堂が建立された。この御影堂においては日蓮の命日たる10月13日を記念する主要行事や日々の行儀がおこなわれ、本堂(釈迦堂)よりも規模が大きく、または、その後において規模を拡大し「大堂」と呼称され、中心的堂宇としての性格が強い。

図-3 長栄山絵図

図-4 長栄山大國院本門寺配置図

それにもかかわらず、現在の伽藍配置は身延山久遠寺、重須本門寺の場合、仁王門（二天門）の軸線上に本堂が存在し、池上本門寺の場合、仁王門の軸線は本堂と祖師堂の中央にあわされている。

この理由は、これらの日蓮宗大寺院においては御影堂の建立後に本堂が建立されたがためと考えられる。

註記

- 1) 櫻井敏雄：鎌倉新仏教仏堂平面の成立と系譜に関する研究、(昭和52年8月、東京大学学位請求論文)。
- 2) 拙稿：日蓮の教義・行儀と伽藍観—初期日蓮教団における伽藍と建築 その1—、(日本建築学会論文報告集、第343号、昭和59年9月)。
拙稿：直弟子にみる日蓮の伽藍観の継承と発展—初期日蓮教団における伽藍と建築 その2—、(日本建築学会論文報告集、第347号、昭和60年1月)。
- 3) 『西山本門寺文書』(立正大学日蓮教学研究所編『日蓮宗宗学全書』—以下『宗全』と略称—第2巻「興尊全集」雑部、p.105)。
- 4) 『要法寺文書』(『宗全』第2巻「興門集」順師之部、p.382)。
- 6) 『宗全』(第1巻「上聖部」祐師之部、p.449)。
- 7) 『宗全』(第1巻「上聖部」祐師之部、p.446)。
- 7) 『宗全』第1巻「上聖部」祐師之部、p.446)。
- 8) 梅本正雄『本化別頭仏祖統記』巻尾、p.6、昭和55年、本満寺。
- 9) 身延文庫所蔵。
- 10) 身延文庫所蔵。
- 11) 身延文庫所蔵。
- 12) 身延文庫所蔵。身延山久遠寺第11世日朝(1500歿)の移転以降、第33世日亨(1721歿)代に至るまでの諸堂建立の記録であるが、日亨筆正本は現存しないが身延文庫には写本がある。別に宮内片岡書寮所蔵本『甲州身延山諸堂明細録』があるが、若干の記述を異にしている。本論文では身延文庫所蔵本を使用した。
- 13) 身延文庫所蔵。
- 14) 『村松海長寺文書』(『宗全』第23巻、No.15)。
- 15) 身延文庫所蔵。
- 16) 日蓮の御影像を祀るところから、御影堂とも一般的に称されているが、日蓮宗では室町時代の中頃より日蓮を指して「祖師」と称するようになり、身延山久遠寺第11世日朝の制定になる『御影講法則』(身延文庫所蔵)に「十月十三日、祖師堂、盛物ハ衆分促—客座加用入堂内出仕僧—一行宛盛之」とあり、第13世日伝代の制定になる『身延山年中行事』(身延文庫所蔵)に「正月十三日、早朝辰刻祖師堂、直ニ登之高座ニ」とあり、祖師堂と呼称されていることから、御影堂と祖師堂は同一の建物と解される。
- 17) 身延文庫所蔵。
- 18) 身延文庫所蔵。
- 19) 身延文庫所蔵。貞享2年(1685)刊行の身延山案内記。
- 20) 身延文庫所蔵。
- 21) 前掲書、櫻井敏雄『鎌倉新仏教仏堂平面の成立と系譜に関する研究』、p.433に収録されている。
- 22) 『本覚寺文書』(『大田区史』資料編、寺社2、No.134の2)昭和58年、東京都大田区。
- 23) 身延山久遠寺の主要堂宇の規模について、『身延山諸堂記』では本堂を「拾一間半四方」、祖師堂「拾七間四方」、位牌堂「十三間半—十一間半四方」と伝え、貞享2年刊行の『身延鑑』では本堂「十三門四方」、祖師堂「式拾一間四面」、位牌堂「十一間に十三間」と伝えており、いずれも祖師堂の規模が大きい。そして、第12世日意、第13世日伝の代に再建された御影堂は文政7年(1824)の火災にあうまで現存し、第13世日伝書『堂供養法則』に「柳梁椽桓万行万善莊嚴」とある文中の「桓」とは来迎柱の意とも考えられ、その施設は来迎柱のつく須弥壇であったと推察される。また、外廻りは元禄16年(1703)の「身延山境内図」(図—1)で見ると仏堂形式の堂宇であったと考えられる。
- 24) 中尾 堯：日蓮宗の歴史、p.19、昭和55年、教育社。
- 25) 『西山本門寺文書』(堀日亨編『富士宗学要集』—以下『富要』と略称—第8巻「讓状」No.2の7)。
- 26) 『北山本門寺文書』(『富要』第8巻「讓状」No.2の6)。
- 27) 『要法寺文書』(『富要』第5巻「宗史部」p.21)。
- 28) 『大石寺文書』(『富要』第9巻「史料類聚2」No.1の7)。
- 29) 『富要』第2巻「宗義部1」p.124。
- 30) 『富要』第2巻「宗義部」p.127。
- 31) 重須本門寺所蔵。大きさ縦60cm・横81cm。木版「重須本門寺絵図」の製作年代は、昭和57年2月重須本門寺より刊行の「重須境内絵図年代考」を参照。
- 32) 『富要』第2巻「相伝・信条部」p.299。
- 33) 拙稿：中世における日蓮宗富士門流の伽藍と建築 その1、(日本建築学会論文報告集、第331号、昭和58年9月、p.124、125)。
- 34) 立正大学日蓮教学研究所編 昭和定本日蓮聖人遺文、第3巻、口絵。
- 35) 『宗全』第1巻「上聖部」p.269。
- 36) 身延文庫所蔵。(本尊論資料、第3編諸山相伝「日朗門流」p.78昭和16年8月、身延山専門学校出版)。この相伝書は日朗門流に代々口伝を相承し、康正3年(1457)に筆録されたものであることから、初期日蓮宗の様相を伝えていると考えられる。
- 37) 『本迹寺文書』(大田区史、資料編1、No.110の2)。
- 38) 『池上幸保家文書』(大田区史、資料編寺社2、No.7の2)。
- 39) 『妙円寺所蔵』(大田区史、資料編寺社2、「本尊類」No.6の21)。
- 40) 『本法寺文書』(大田区史、資料編寺社2、No.6の11)。
- 41) 『妙嚴寺文書』(大田区史、資料編寺社1、No.120の10)。
- 42) 『本法寺文書』(大田区史、資料編寺社2、No.6の11)。
- 43) 『光福寺文書』(大田区史、資料編寺社1、No.104の18)。
- 44) 『浄蓮寺文書』(大田区史、資料編寺社2、No.69の10)。
- 45) 『池上幸保家文書』(大田区史、資料編寺社2、No.7の3)。
- 46) 『池上幸保家文書』(大田区史、資料編寺社2、No.7の8)。
- 47) 『本覚寺文書』(大田区史、資料編寺社2、No.134の2)。
- 48) 『妙覚寺文書』(大田区史、資料編寺社2、No.133の4)。
- 49) 身延文庫所蔵。(宗全、第21巻「諸師書状」No.1)。
- 50) 『光福寺文書』(大田区史、資料編寺社1、No.104の38)。
- 51) 『池上本門寺文書』(大田区史、資料編寺社1、No.14の51)。
- 52) 『池上本門寺文書』(大田区史、資料編寺社1、No.14の52)。
- 53) 『池上本門寺文書』(大田区史、資料編寺社2、No.140の4)。
- 54) 『池上本門寺文書』(大田区史、資料編寺社2、No.140の4)。
- 55) 「長栄山絵図」前掲書(大田区史、資料編寺社1の付図1)。池上本門寺所蔵、大きさ縦130cm、横114cm。日顕筆、

元文年間頃の絵図としているが、本堂が描かれていないことから、祖師堂が再建された享保7年(1722)から本堂再建の享保15年(1730)の間に描かれたものと推察される。

56) 「長栄山大国院本門寺配置図」前掲書 大田区史, 資料編 寺社1の付図4。新倉善之氏所蔵, 大きさ縦83 cm, 横49 cm。文久3年(1863)の作図。

57) 『妙泉寺文書』(大田区史, 資料編 寺社1, No.109の49)。

SYNOPSIS

UDC : 72.03 : 726.134

ON THE PLAN ON THE COMPOUND IN THE BUDDHIST TEMPLES IN MINOBUSAN-KUONJI, OMOSU-HONMONJI, AND IKEGAMI-HONMONJI, BELONGED TO NICHIREN-SECT

by Dr. HIROYUKI NIWA, Associate Professor of Hiroshima
Institute of Technology, Member of A. I. J.

In case of Minobusan-Kuonji, Omosu-Honmonji, Ikegami-Honmonji, the "Miei-Do" (founder's hall) was established earlier than the "Hon-Do" (main hall). This "Miei-Do" has the significance of staple construction in all the Buddhist temples. Therefore, We considered that these facts had influenced on the plan of the compound in the Buddhist temples.